

まきさと
牧郷豆の会 (相模原市)

楽しさを求めて交流する親父たち

■地元有志の会

「親父たちによる、親父たちのための、親父たちの会」を標榜している地元の有志により結成されました。それぞれの職業経験を活かし、休耕地を利用した大豆や麦の栽培、味噌やうどんづくり、イベントへの出店など、様々な取組みを行っています。

■「楽しい」ことをやりたい

設立以来、会長を務めているのは倉田 実さん。50代前半の頃、定年を見据えて趣味を探し

ていたときに、味噌づくりに出会いました。大豆づくりから始めればもっと楽しいし、休耕地が多い地域の役にも立てるだろうと、監督を務めていたソフトボールチームの仲間へ声をかけ、休耕地を借り、大豆栽培を始めました。それからというもの、仲間とともに日々いろいろなことを楽しんでいます。

例えば、竹が繁茂して困っているという話を聞いたとき、竹炭を作れば楽しそうだと、空い

ている炭焼き小屋を借りて炭づくりをしてみました。皆でお酒を楽しく飲みながら、一晩中、火をくべていたそうです。また、近所の山のお社がボロボロになってしまったと聞いたときも、宮大工だったメンバーが造りなおしたお社を鉄骨で作った台に乗せ、付き合いのある大学生たちと一緒に、みんなで山の上まで運んだそうです。「きっかけはいつも酒の席での他愛もない雑談」と倉田会長は笑います。



一言アドバイス
何よりも自分たちが楽しむことが大切です。

牧郷豆の会
会長 倉田 実さん

成功のコツ

- ・人に楽しんでもらうためには、まず自分が楽しむこと
- ・地域の困りごとに楽しみの種を見つけること
- ・仲間になるためにはちょっとした出会いを大切にすること

はにこやかに話しました。

■自分たちが楽しむことが重要

そんな牧郷豆の会が最も大切にしているのが、「自分たちが楽しむ」こと。倉田さんは、「誰かのためにしていると考えたと、その人に何かを求めてしまいます」と話します。自分が楽しんだ結果として人が喜んでくれば、それが地域で連鎖していく、そんなことを考えて活動しているそうです。「これから老人クラブに入るので、きっとそこでも新しい仲間に出会えます。そうすればまた新たな楽しみに出会えます」と楽しそうに

話す倉田さん。牧郷豆の会はこれからも「楽しさ」で人の輪を広げていきます。





りょうせい
夕やけ綾西歌くらぶ（綾瀬市）

歌を通じて高齢者がつながる地域限定 コミュニティ

■「歌」が生む高齢者のつながり

「夕やけ綾西歌くらぶ」は、綾瀬市綾西地区在住者による歌のサークルです。月に2回自治会館に集い、様々なジャンルの曲を歌っています。ここでは、「歌」を通じて地域の高齢者同士のコミュニティが生まれています。2010年4月の立ち上げから10年、笑顔とつながりを生み続けています。

クラブ設立のきっかけは、運営者である声楽家の関根 宣義のぶよしさ

んが海老名市で開いていた300人ほどの高齢者合唱団です。そこに綾西地区からの参加者がいて、自分たちも地域の人たちと歌を通じてつながりたいと、関根さんに相談したそうです。

綾西地区は、昭和40年代に宅地開発され、働き盛りだった同年代の方々が一斉に転入した地域で、高齢化が一気に進んでいます。そんな地域の現状を知った関根さんの「歌を通じて高齢者の方が笑顔でつながる場

所をつくりたい」との想いから、夕やけ綾西歌くらぶを立ち上げました。

■自分の想いを歌う

クラブの参加者には役職もなく、緩やかに運営されています。歌うのが好きな人、聴くのが好きな人など、誰もが気楽に参加できる場所でこの地区の在住者という条件だけで、ユーモラスな先生のもとみんな楽しんで参加しています。ちょっとした相談ごとから出発した歌くらぶで

一言アドバイス

「楽しく参加していただくにはどうすればよいか」から
 活動内容・運営方法を考える。

夕やけ綾西歌くらぶ
のぶよし
 運営者 関根 宣義さん

成功のコツ

- ・歌の持つ力を課題解決につなげる
- ・参加も不参加も自由にできる環境づくり

■楽しさに我を忘れるほどの心地よさ

「高齢者の方の孤独を解消したいのです。今日出会った人が、歌を通じて満面の笑顔になってくれたら、最高です」と関根さんは話します。杖をつきながら参加した方が、帰りには楽しさのあまり杖を忘れて帰ってしまったこともあったとか。このような楽しい空間を共有することで、商店街で声を掛け合う、仲間がお休みの時は気に掛ける、など参加されている方々の気持ちがどんどん温かくなっています。

関根さんにこれからの会の展望を尋ねると、「歌っているうちに気持ちが変わり、お互いにいてくれてありがとうと思う、素直で優しいほほ笑みにあふれた会にますますなればうれしいです」とのこと。夕やけ綾西歌くらぶは、これからも笑顔の広がりを中心になっていきそうです。





葉山芸術祭実行委員会（葉山町）

アートによるコミュニケーションイベントを

■アートと地縁のコミュニティ

葉山をアートで盛り上げようと、町内外の芸術関係者有志が実行委員会を立ち上げ、1993年から27年間、毎年春に「葉山芸術祭」を開催しています。

委員会が、100を超える参加者と企業・団体との調整に尽力し、町内各地で120件以上のイベントが約2週間にわたって行われます。「アートと地域とのコミュニティ」を考えながら続いている葉山芸術祭は、地域全

体を巻き込む一大コミュニケーションの場となっており、町内外から毎年述べ2万人の方が来場しています。これほどのイベントが7、8名の住民により3世代にわたって続けられているのは、驚くべきことです。

■上下のない緩やかな雰囲気

芸術祭が始まった頃は、シニアの建築家が中心で「アカデミックな音楽と芸術を葉山で」という内容でした。それが開催4年目頃から「プロも素人も同

じ立場で参加する」という現在の方針に変わりました。その頃、実行委員会に加わったのが松澤利親さん。起業後に声をかけられたことがきっかけでした。

「緩やかな雰囲気、みんなが対等に納得いくまで話し合いをする、その伝統は今でも続いています」と話す松澤さん。少人数のチームで芸術祭を続けるポイントは、「自分が楽しむために背伸びし過ぎないこと」です。そのために、各自責任を持てる



一言アドバイス

引継ぎにあたっては、「見える化」と「仕組み化」が大切。



葉山芸術祭実行委員のみなさんと事務局長さん（後列右から2番目が松澤 利親さん）

成功のコツ

- ・何年もかけて引継ぎを行い、その後は身を引いて次の世代に委ね助言に徹する
- ・活動メンバー構成は常に多様性を重視
- ・企画運営のお金と安全は注意深く慎重に

陰で支える

範囲で取り組んでいます。

■円滑な世代交代

第二世代にあたる松澤さんが、第一世代の方々から事務局を委ねられることになったとき、しっかりと議論しながら何年もかけて少しずつ引継ぎが行われました。しかも、第一世代の方は、身を引いてからは求められてアドバイスする以外、全て任せていたとのこと。松澤さんは「こうした引継ぎを体験したことが大事。いきなり完

全に引き継ぐのではなく、何年も前から地域の人的ネットワークを共有し世代交代を意識することが鍵です。」と話します。

また、長年活動を続けているうちに「世代間の価値観の差」という課題に直面したそうですがこれについても世代交代と同様で、時間を掛けて話し合い、委ねるべきものは次の世代に委ねることが重要とのこと。

その中で、新たな仲間を探すときは、世代交代とともに委員会が常に様々な角度で物事を考えられるよう、メンバーの多様性を常に意識しているそうです。

「緩やかな雰囲気であっても安全とお金だけは注意深く対応しなければなりません」と話す松澤さん。この二つは失敗すると取り返しがつかないもので、これがきっかけで活動がバラバラになってしまうこともあるため、慎重に取り組むことが重要と気を引締めます。

第一世代から第二世代へ、そして今第三世代へ引き継がれつつある葉山芸術祭。実行部隊の委員会では、これからも「アートと地域のコミュニティ」をテーマに多くの人を魅了していきこうと意気込んでいます。



一般社団法人ユースクラシック（横浜市）

音楽の力でコミュニティを活性化

■地域に密着した音楽活動

ユースクラシックは、2013年4月に音楽大学を卒業した有志により結成されました。団地や古民家、高齢者施設などでコンサートを実施し、2020年3月現在で現役音大生や若手音楽家25名が在籍しています。設立以来、代表として団体をまとめているのは陶 旭茹さん。音楽大学の学生は、演奏ではプロフェッショナルでも、仕事を得るのが苦手で、「チームで助け

ば仕事の幅が広がるし、何より孤独感がなくなる。」そう考えてユースクラシックを立ち上げました。

■老人ホームでの活動

自分たちでコンサートすることに加え、有料老人ホームの「コーラス部」の指導も行うようになりました。最初はコンサートの中でお客さんも交えて歌うコーナーを設けていたのが、いつしか「コーラス部」に。月に2、3回みんなで練習して


います。歌う曲目は参加者からのリクエストで決定します。それぞれの曲に参加者の想いがあり、自分のリクエストが採用されるととても喜んでくれるそうです。

この老人ホームは入居者の平均年齢が約84歳ということもあり、約半数の入居者が何らかの支援や見守りを必要とする状況ですが、コーラスをきっかけに友達ができたという方もおり、高齢者の生きがいづくりに



一言アドバイス

事前にアンケートを取るといいですよ。



一般社団法人
ユースクラシック
代表 陶 旭茹さん

成功のコツ

- ・お客さん同士が交流する場も設けること
- ・若い世代にも参加してもらうことで高齢者もいきいきと
- ・参加者やお客さんのニーズを的確に把握すること

つながっています。2015年からは、この老人ホームの県内5カ所の拠点から入居者が集まって、合同コンサートを開催しており、日頃の練習の成果を発揮しています。総勢約100名もの入居者によるベートーヴェンの交響曲第9番「歓喜の歌」は壮観です。今では近くの中学・高校の生徒も参加するなど、多世代交流も進んでいます。

■ニーズを的確に把握する

県の住宅供給公社と連携して定期的実施している「団地ミニコンサート」も活動の軸の一つ。団地の集会場などでコン

サートを実施し、高齢化が進む団地の居住者の方が気軽に外出するきっかけとなっています。コンサート後のお茶会では、お客さん同士が交流を図っています。さらにコンサートに参加したことで、移住してきたシニア世代の方が団地のコミュニティ

にスムーズに入れた、という声もあるそうです。コンサートの前には主催者の方にアンケートを取り、時間の長さや曲目の希望を聞きます。地域のニーズを的確に把握することが、人と人とのつながりを生み、地域に根付いた活動を目指しています。





いずみ中田の蕎麦打ち会（横浜市）

メンバー全員がスキルや経験を活かして



■自分たちの手で美味しい蕎麦を打ちたい

きっかけは踊場地域ケアプラザでの体験講座「俺の蕎麦打ち」でした。「俺の蕎麦打ち」は、蕎麦の種まき、収穫、製粉、蕎麦打ちまでを通年で行う講座で、2017年度に始まりました。

横浜市内で農地が最も多い泉区の特徴を活かした取り組みです。

この蕎麦打ち、一朝一夕ではマスターできず、もっとうまくなりたいという想いから、一期生は二期目の活動にも参加し、次第に一期生と二期生のつながりが生まれ、このまま解散してしまうのはもったいないと、有志のメンバーで「いずみ中田の蕎麦打ち会」を結成し、「俺の蕎麦打ち」と同じ農地で活動を続けています。三期生からもメ


ンバーが加わり2020年3月現在18名で活動しています。

■メンバーそれぞれに考えてもらいたい

会を引っ張るのは、会長の齋藤 猛さん。仕事をリタイアした後、地域ケアプラザの食に関する講座に参加するうちに「俺の蕎麦打ち」に出会い、第二期生として参加しました。

会長として工夫していることは、メンバー全員に何らかの役割を担ってもらうこと。会長や

一言アドバイス
シニアにはたくさんのスキルや知見がありますよ。



いずみ中田の蕎麦打ち会
会長 齋藤 猛さん

成功のコツ

- ・メンバー全員に何らかの役割を担ってもらい、自分事としてとらえてもらう
- ・メンバーのスキル、経験、人脈を最大限に活用する

役割分担

副会長のほか、幹事や会計、蕎麦の生育を見回す際のグループの班長・副班長など、全員が何らかの役割についています。そうすることで、メンバー一人ひとりが「自分は会のために何ができるのか」ということを考えながら活動できます。

■メンバーのスキル・つながりを活かしてサステナブルに
会のもうひとつの特徴が、財源面の課題を補うメンバーのスキルや経験、人脈の活用です。

会長の齋藤さんは元エンジニア。ビニールハウスを建てる際には自ら図面を書いて寸法を割り出しました。ビニールハウスの骨組みには近隣の農家からもらった廃材を利用しています。また、メンバーの一人が近所の乗馬クラブが馬糞の処理に困っているのを知って馬糞を利用するようになりました。

■地域の活性化を目指して
いずみ中田の蕎麦打ち会のメンバーは、2つの連合自治会にまたがる広いエリアから参加してきています。そのためは、

それぞれの住む地域がどのような状況であるのかという情報交換の場にもなっています。

台風の影響で収穫が激減するなど、自然を相手にするのは難しいですが、自然の中で物づくりをする活動にとって、これは宿命の問題です。しかし、これさえも受け入れる心境や、理解し、楽しむ余裕こそ、この活動の良いところとメンバーのみんなも理解しつつあります。会では、蕎麦打ちをスキルアップさせ、いずれはイベント等で蕎麦を振る舞うなど、地域の活性化を目指して活動を続けています。



馬堀海岸遊歩道早朝ランニング (横須賀市)

走りたい人、この指とまれ! で新たなコミュニティ誕生

■海岸のプロムナードを走る老若男女

横須賀市にある馬堀海岸の遊歩道で箱根駅伝の走者だった大森 英一郎さんが「ランニング」を軸としたコミュニティづくりに取り組んでいます。2019年12月からスタートし、毎週土曜日の早朝に老若男女が自由なスタイルで5キロを踏破するというもので、今では30名ほどのチームになっています。

地元の横須賀市内で観光関連

の仕事をした後に東京で起業した大森さん。いつかは地域に貢献したいという想いを抱いていたところ、横須賀市から馬堀海岸のプロムナードを観光資源として使えないか相談があり、この取り組みを始めたそうです。

■ランニングが生む多種多様な人たちのつながり

「この取り組みは、年齢や運動能力を問わず誰もが気軽に無料で参加できます。走っても歩いても構いません。応援係やス

タート係のような形で自由に参加できます」と話す大森さん。

特徴的なのは参加者の多様性です。参加者は、大森さんも含め、お互いほとんど知らない人ばかり。新聞を見て走りに来た人もいれば、近所に住んでいる人、犬を連れてくる人、ランナーを励ますハイタッチをしに来てくれる小学生など様々です。普段は触れ合うことがない、お互いに名前も職業もわからない人たちが一緒に参加し、気が付け

一言アドバイス

間口の広さと継続性を
持たせることが重要。

馬堀海岸遊歩道早朝ランニング
発起人 大森 英一郎さん

成功のコツ

- ・自由な参加形態により広がる人のつながり
- ・活動の後の交流もコミュニティを深める機会
- ・共通の趣味は人と人との距離を縮める

を舞台に、継続的に人のつながりを生み、育んでいくのがこの会です。

ランニングという共通の趣味により、これまで接することのなかった人たちのコミュニティが生まれている馬堀海岸遊歩道早朝ランニング。これからも新たな人のつながりが生まれていきます。

